

とうほく街道会議

年金馬
仙北領下見歸白五里拾六町三拾間



とうほく街道会議 第7回交流会 「よみがえる仙北道」東成瀬大会

東北の街道から夢・未来を語る
歴史の道 日本一のブナ街道

平成23年
日 時 10月14日(金)15日(土)

主会場 地域交流センター「ゆるるん」
秋田県雄勝郡東成瀬村岩井川字東村72
Tel. 0182-47-3511

報告書

挨拶

大会実行委員長 東成瀬村長 佐々木哲男氏



東成瀬村が村制を執行して100周年にあたる年、「村を語る集い」の中で、東北大学文学部教授から盛岡大学学長になりました高橋富雄先生をお呼びしまして、村の歴史と将来について語っていただきました。講演が始まる前の懇談で、村の郷土史研究に関わっている方々が、「義経は仙北道を通ったのではないかと思いますが、どうでしょうか」という話が出ました。「ぜひ先生からこの話を強調していただけませんか」という趣旨の話をしたのですが、高橋先生に「史実がないのにそれを申し上げることは出来ない」と言われました。

NHKの大河ドラマ「炎立つ」で、戦に通った道が、鬼切部、鬼首であるとありました。どうして平泉からこの仙北道があるのに、鬼首まで南下する理由があるのかと疑問に感じました。しっかりとした史実があるためでしょうが、私は仙北道を通ったのではないかと思っています。

湯沢市出身の良翁禪師という方がおります。東成瀬村の岩井川にある龍泉寺という所で剃髪し、中尊寺に行って修行し、そこから全国に修行に歩かれて大変な高僧となられた方です。私は中尊寺に行くときもこの仙北道を通ったのではないかと思っておりますが、師の『了翁禪師没後300周年記念誌』には他のルートで中尊寺に行ったとあるので、これも違うのか、と残念に思っています。だが中尊寺に行くには仙北道が近いので、いつかこれが史実として出てくるのではないかと期待してます。

私どもと岩手県は、昔から文化・物資の交流などで深い繋がりを持った地域です。最近では東日本大震災において、横軸である肋骨路線が大きな輸送効果を果たしました。仙北道に並行して走っております国道397号もそうですが、先祖伝来、道路の整備は村の大きな課題となっていました。これからも我々は昔の人と同様に、新たな道路整備という視点にも目を向けていかなければいけないと感じています。

とうほく街道会議も7回目も数えるなか、交流大会をこの村で開催していただいたことは、我々にとって大きな励みになります。同時に3年前に加盟した「日本でもっとも美しい村連合」に東成瀬村が加盟できた要因は「仙北道」「緑の回廊」「田子内橋」の三点です。今日は日本で最も美しい村連合の加藤理事もおいでになっていて、村内を細かく視察していただいています。視察後、交流大会にご参加いただき、皆さんといろいろ意見交換していただけるのは、ありがたいことだと思っています。

とうほく街道会議は、街道を持つ団体や自治体を中心として互いに交流を深めあい、夢を語りあい、街道の持つ意味を確かめあう大事な場所です。将来に亘ってさまざまな事業を展開するにあたり、今日の大会は大変大事なものになるだろうと思っています。



当日プログラム

10月14日（金）交流会

1. オープニングセレモニー

・セレモニー

- ・長谷川 留美子 氏（秋田市<東成瀬村出身>声楽家）
- ・実行委員長挨拶 東成瀬村長 佐々木 哲男 氏
- ・主催者挨拶 とうほく街道会議事務局長 山屋 敏英 氏
- ・来賓挨拶 東北地方整備局道路部長 川瀧 弘之 氏

2. 基調講演 「日本一のブナ街道 仙北道の昔と今」

講師 藤原 優太郎 氏（秋田市とうほく街道会議会長）

3. 次回開催地挨拶

ふくしまけん街道交流会 代表世話人 沼田 典雄 氏

4. 第1分科会 「仙北道を考える」

パネリスト

- 鈴木 輝男 氏（岩手県奥州市胆沢区 仙北街道を考える会監事）
- 石川 利己 氏（岩手県奥州市衣川区 漆の道踏査隊長）
- 佐藤 豊 氏（横手市増田町 増田町文化財協会副会長）

アドバイザー

藤原 優太郎 氏

コーディネーター

谷藤 広子 氏（東成瀬村 仙北道を考える会幹事）

5. 第2分科会 「日本一美しい村にするには」

パネリスト

- 加藤 俊宣 氏（東京都 NPO 法人「日本で最も美しい村」連合理事）
- 東屋 幹男 氏（東成瀬村 NPO 法人栗駒山麓遊ゆうの会理事）
- 谷藤 トモ子 氏（東成瀬村 農事組合法人なるせ加工研究会代表理事）

アドバイザー

長谷川 留美子 氏

コーディネーター

鎧 啓記 氏（秋田市 NPO 法人あきた地域資源ネットワーク専務理事）

10月15日（土）

6. 街道探訪会 A 「仙北道を歩こう」 踏査コース

7. 街道探訪会 B 「仙北道を学ぼう」 バスツアーコース



基調講演

講師 藤原優太郎
(とうほく街道会議会長)

皆さんこんにちは。今日はとうほく街道会議東成瀬大会に、大変多くの方々にお集まりいただきまして、厚く御礼申し上げます。今日はこの東成瀬大会のテーマである仙北道（せんぼくみち）につきまして、私が知る限りのお話をしたいと思っております。

今回のテーマは「日本一のブナ街道仙北道の昔と今」です。日本一というのは、本当に自然が豊かで途中に人工物がなく、森に入つたら街道沿いにブナがどこまでも続く、おそらく日本一長い山越えの歴史街道だと思って命名しました。

仙北道とは

「仙北道とは何なのか」、というところから話していきたいと思います。もともとこの道は奥羽山脈を横断する距離が長く、険しい山道でしたが、昔の人はこのような道をなんとも思わず通ってたと思います。

まずは仙北道を歩く場合のルートを簡単に紹介します。東成瀬村の国道342号沿いの椿川から林道に入ります。姥懐が林道の終点でそこから歩き始めます。十里峠、藩境塚、景色が見渡せる丈ノ倉と県境の道が続き、柏峠を越えると道は下りとなって岩手県に入ります。山ノ神、中山小屋と続き、小出川までいったん下ります。それから大胡桃山を上り下りし、さらに小胡桃山を通って行くと終点の下嵐江に着きます。昔は嵐と書いたようですが、今は下の嵐の江という文字を使っています。

全行程6里・24キロで、江戸時代になってから、双方に御番所が設けられました。昔は御番所（ごばんどころ）と呼んでいたようです。手倉から入った最初にある曲坂（まがさか）には石碑があって、「右ハせんだい道」と彫られています。

古代・中世の山越え戦乱の道

横手盆地からの古代五道という古い道があります。ひとつ目が鷲座（わしくら）といわれた須川峠、二つ目の柳沢越えが今日のテーマにしている手倉越えの道。三つ目が旧山内



村と湯田町を結ぶ大菅ノ谷（おおすげのや）で白木峠の道、四つ目が楯座（たてくら）の善知鳥越え・真昼峠、五つ目が石沢、国見越えです。

古代から中世にかけての歴史的拠点として、多賀城があげられます。陸奥国と出羽国を束ねる国府があった所で岩手県奥州市の胆沢城とともに、太平洋側の政治・軍事の拠点でした。また山形県酒田市にあった城輪柵（きのわのさく）、秋田市高清水の秋田城が出羽の二大拠点で、他に由利柵、雄勝城、払田柵（ほったさく）などがありました。

平戈山（ひらほこやま・比羅保許越え）というものが頻繁に歴史書に出てきますが、これは神室山のどこかを越えた道ではないかという説があります。これが古代五道の中に入っていないのは、時期が違っていたか、目的が違っていたかではないでしょうか。平戈越えはどこかというと、山形県と秋田県を結ぶ雄勝の有屋峠ではないかと私は思っています。古代から中世の峠道で、院内峠が開かれる前のメインの峠です。

『続日本記』の記述に、宝亀7年（776）、兵士二万人を発動させ、山海二道、つまり山の道と海の道の賊を討つべきであるとあります。それを受けた天皇は、出羽国に勅（みことのり）を発して兵士四千人を動員させ、雄勝の道から出て陸奥の精銳の賊を討たせたとあります。この時の遠征路が仙北道と考えられます。

羽後町西馬音内の近くに三輪神社という古い神社があります。大和（奈良県）の三輪山を御神体とする神様です。また胆沢城と払田柵を結ぶラインに、真昼山という大きい山があります。この頂上に祀られた神社も三輪神社です。大和の神が蝦夷の多く住む地方にあるというのは、神の力で地方民を懷柔しようと考えたためではないでしょうか。

たとえば雄勝城から秋田城に緊急連絡をしたいとすれば、途中に保呂羽山や高尾山などが並びます。ということは、烽火（のろし）を上げて（煙ファイバーで）連絡しあうのは可能であったと考えられます。払田柵は真昼山の麓にあり、雄勝城近くの太平山のてっぺんにも神社があります。その名も煙岡神社です。ここからはまた直線上に保呂羽山、高尾山、高清水の岡が続きます。連続しながら煙を上げれば、煙ファイバーで連絡は出来たでしょう。

信仰と戦略

『あきた古代史ノート』という歴史の謎を集めた本があります。この中に私が書いた秋田の古代の道が掲載されています。延喜式内社という、国家が定めた格式ある神社が選抜されたリストがあり、これに秋田の神社が三社選ばれています。

保呂輪山には波宇志別神社があり、秋田県の神社の筆頭格で、横手と旧山内村の境にある御嶽山には頂上に塩湯彦神社があります。もうひとつが大仙市神岡にある神宮寺嶽の副川（そえがわ）神社です。副川神社は佐竹氏の時代、八郎潟近くの高岳山に移され、佐竹氏が北方の守りとしました。これが秋田の神社ベスト3ですが、これら三山の周辺は仙北平野、平鹿平野などの恵まれた穀草地帯だったためか国家が特に大事にしました。

租・庸・調という税の仕組みがあり、米どころ仙北平野、これが国家にとっても大事な重要な税金収入源地域でした。ところが、ここになかなか従わない地方民がいたため、この地方民をなんとか丸めこもうと神社に高い

神格を与えて、信仰面からなんとか懐柔できないかと考えたわけです。ここに神の力を借りた地方民への政策が見えてきます。もともとは地方の地主神がいたはずですが、これが古代から中世にかけ、大和国家がとってきた戦略だったと思います。

前九年合戦、後三年合戦と仙北道

古代末期、前九年と後三年の合戦が起こります。これは源氏を中心とした中央勢力と安倍氏、清原氏という地方豪族との権力争いでした。

前九年の合戦は平安時代の末期、1051年から1062年にわたって続きました。これは陸奥の豪族、安倍頼時、貞任・宗任らの反乱を、源頼義・義家親子が平定した戦いというものでした。

前九年の戦いで安部氏が滅ぼされ、何年か経つて今度は源氏と清原絡みの戦が起こってきます。これは出羽と陸奥に勢力を持っていた清原一族の内紛で、この身内の争いに源八幡太郎義家が介入したのが後三年の合戦です。

この合戦で清原一族を一掃した藤原清衡が平泉に中尊寺を建て、平泉の初代となります。その清衡から秀衡、基衡三代が黄金文化を築きました。平泉では東北地方はおろか、海を越えた大陸まで勢力を伸ばした可能性が高いといわれています。平泉黄金文化に寄与したのが東北各地の金山です。平泉の絶大な勢力が秋田側に勢力を伸ばした時、仙北道もそれに大きく関わってくるのではないかでしょうか。

今日の分科会テーマにもなっている「漆の道」ですが、岩手県の小説家中津文彦さんの作品に『黄金流砂』という推理小説がありま





す。平泉の人たちが、仙北道のあたりに貴重な漆の甕を隠したという話になっています。平泉にとって漆もまた非常に重要な資源で、煌びやかな文化を築く意味でも、金以上に価値が高かったといえます。平泉が築いた文化的流れは、奥羽山脈の山道を通して秋田にも大きな広がりを持ったといえるでしょう。

藩政時代 経済文化伝播の道

江戸時代になると民間交流（商取引）も盛んになりました。仙北道を利用した物流品の中に川連（湯沢市）の漆器があります。川連漆器を背負って仙北道を越えた人も沢山いたでしょう。また仙台方面からは三陸の魚や金属農具などが入って来たものと思います。

仙北道中間点の中山に「助け小屋」を作り、そこで物資の交換や休憩、宿泊などをしたというのも事実でしょう。商人は馬を使ったり、牛を使ったりしてたくさんの商品を運びました。

仙北道を通じての逃亡の道についてちょっとお話しします。水沢に後藤寿庵という有名なキリストンがいました。仙台（伊達）藩の家臣で、水沢の福原地区に1200石の領地を与えられていました。のちに伊達政宗の厳しいキリストン弾圧に耐えかねて逃亡したといわれていますが、仙台の古文書には南部の方に逃げたとあるそうです。しかしそれは一種のカモフラージュで、実際は仙北道方面に潜伏したんではないかとも考えられます。

江戸時代初めの寛永8年（1631）、水沢から小原縫殿之助という人が増田（横手市）に移ってきました。この人は侍だったようですが、一緒に増田に逃れてきた百姓11名がいたということです。寿庵が逃げた時も11名と一緒にされていますので人数が一緒です。縫殿之助の逃走と寿庵の逃走には3年のずれがありますが、果たしてこれは偶然でしょうか。秋田県にキリストンが多かったのは、鉱山が多かったためです。院内銀山などの鉱山は、キリストンや罪人が逃げ隠れる格好の場所で役人も勝手に入れなかった所でした。

近代道路の発達

明治になってから新しく近代国家が出来て、各地にいろんな国道や県道が出来、鉄道も開通し始めました。

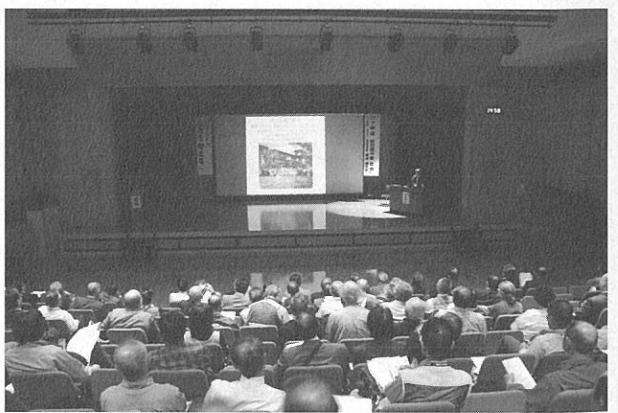
国鉄横黒線（現JR北上線）は大正13年、黒沢尻と横手間に開通しています。その時代、仙北道に執着した人物が水沢にいました。砂金兵記（いさごひょうき）という人です。この人は大正10年7月29日から3日間、水沢の青年団を伴い大挙して東成瀬村に来ています。仙北道を歩いて来て帰りは汽車で戻ったようです。

砂金兵記という人はどういう人だったのでしよう。明治13年から昭和37年まで生きた人で、水沢町会議員のほか、水沢銀行などの金融関係、交通網の整備に執念を燃やし、教育文化にも尽力した人です。特に県道十文字水沢線（これは今の国道397号ですが）の道路を作るために非常に努力しました。

私は今この人に関する資料集めをしています。水沢には砂金兵記のほか、斎藤實（まこと）、後藤新平、高野長英と「水沢の三偉人」と呼ばれる人たちがいます。斎藤實は総理大臣も務めています。斎藤は水沢藩の家臣の子でした。二・二六事件で殺害される前の年、架け替えた東成瀬村の田子内橋や、県道水沢増田線の工事状況、川連の漆器産業の視察を目的に東成瀬、増田、川連を訪れています。

今、よみがえった仙北道の復活作業は平成2年から始まり、昨年（平成22年）20周年を迎えるました。道づくりは秋田県と岩手県の民間ボランティアによる活動ですが、歴史的に非常に意味のある街道はなんとしても将来に受け継いでいかなければいけません。

継続することは肉体的、経済的に大変ですが、活動が止ると道は無くなってしまいます。この偉大な事業を、今の人たち、これからの人たちに受け継いでもらうことが大事だと思っています。



第1分科会

第1分化会「仙北道を考える」

谷藤 広子(コーディネーター): 第一分科会は「仙北道を考える」では、仙北道をこれからどうすればいいかについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

仙北道の関わりについて

鈴木 輝夫(パネリスト): 奥州市水沢から来ました鈴木輝夫です。仙北街道は踏査され、しっかりと歩く道が出来ました。国土地理院発行が40年前に発行した5万分の1地形図には、仙北街道が小道として示されていました。ところが新しい地形図では道は消えてしまっていて、非常に残念です。復活してもらいたいですね。

私が幹事を務めている「仙北街道を考える会」では、20年前から仙北街道の調査を行っており、私は踏査に9回参加しています。歴史の事はあまり詳しくありませんが、30代から仙北街道に関心を持って、いつか歩いてみたいと思っておりました。仙北街道で「山神」の碑を始めて見た時は感激しました。

石川 利巳(パネリスト): 私のお爺さんは秋田県の川連生まれで、小さい頃親父に「手倉越えしてきた」と教えられました。長い間、手倉越えとは何だろうと思っていましたところ、平成2年、岩手日報で仙北街道の記事を見て、それで手倉越えを知りました。

平成8年でしたか、岩手県の活性化事業で、国道397号を通年通行させようというイベントを行う事になり、増沢の漆器は秋田の川連から伝わってきたという話をもとにした「漆の道交流事業」を始めることにしました。増沢には川連から移ってきた家が多くあり、増沢の漆を一大産業に発展させました。大正時代、衣川村の総予算を超える金額を、増沢の漆が稼いだと聞いています。

「漆の交流事業」では私が仙北街道の踏査隊長になり、48人で藪こぎしながら初めての山越えをしました。翌年からは営林署と話し合いをし、刈り払い許可を取って道の整備を行いました。

佐藤 豊(パネリスト): 私は横手市役所職員ですが、家は増田町にあります。平成2年から足掛け9年間、「増田町史」の編纂事業に携わりました。この事業に関わって一番感じたのは「増田は凄い所」ということです。そのことを皆さんに知ってもらいたくて、増田の観光ガイドの会を立ち上げ、蔵を観光資源として活用することを始めました。

文化財の増田分科会役員やっていますので、増田には立派な蔵があること知っていたためです。平成15年から足掛け3年間事務局をやり、写真集『増田の蔵』を刊行させ完売。翌年、写真集に掲載されている蔵の所有者を会員にした「増田蔵の会」を立ち上げました。その年に蔵の見学会を開催したところ、3000人近い人が訪れてくださいました。現在、国の重要伝統的建造物群保存地区指定を目指して、調査を行っています。その後、観光客もだんだん多くなり、観光ガイドも年間2000人くらいを相手にガイドを行っています。「どうして増田にはりっぱな蔵が沢山あるのか」とよく聞かれます。江戸時代後期の約100年間に、通りが全焼する火事が3~4回起きたことから、防火の意味で蔵が多くなったことと、街道を通じて増田の商人が金持ちになった事が大きいと思います。

谷藤: 鈴木輝夫さんは仙北道をかなりの回数歩いておられると思いますので、これからこの街道を、自分なりにどうして行きたいか、お話いただけますか。

鈴木: この道は歴史があって、古いことが絵図にも示されています。絵図には一里塚ばかりだけでなく、藤原先生が話された境塚も描かれています。一里塚の存在がはつきりと確定できない場所もありますので、一里塚の発見に努めたいと思っています。

もうひとつ、藩境塚の復元が可能であれば、面白いなと思っています。こここの境塚は胆沢若柳の古文書の中に、「高さ六尺 回り四間」と大きさが示されています。そういう復元をすると、楽しい街道になるのではないかでしょうか。

谷藤: 境塚は秋田藩と仙台藩の藩境塚のことですね。秋田県側から行くと十里峠があつて藩境塚と呼ばれる場所があります。

秋田藩と仙台藩の境があった所で、「石の道標 境塚高さ六尺 回り四間」という大きな藩境塚があったと示されていますね。復元作業は大変な事業になると思うますが、よいお話を感じました。

鈴木: 付け加えたいのですが、仙台藩の『封内風土記』のような風土記が全国的に作られたんと思うんですが、秋田藩の風土記があるか、ないかという事に感心があります。

谷藤: 石川さんにお聞きします。増沢塗の話をしましたが、増沢はダムに沈んでしまった村でもう残っていませんが、近くにある平泉との関係をお話いただけますか。

石川: 増沢地域は、今は無人の里です。昭和22、23年のアイオン・カスリン台風で、衣川に36あった橋が全部流されました。

その後、県では下流の一関を守るために衣川に5つのダムを作りましたが、工事ため増沢では50戸からあった村が移転をしました。昭和28年から32年にかけてのことです。移転する時点ではかなりの人達が漆器に関わっていました。

縁は巡りますが、平泉の漆器集団はお椀、お膳を作っていましたが、漆は弓や槍にも使われていました。藤原泰衡が源頼朝に滅ぼされ、工人たちが平泉から逃げたようです。そのうちの一集団が秋田県の東福寺山（湯沢市駒形）で細々と漆器の仕事をしたと伝えられています。

私たちは漆のセミナーでそのことを知り、訪ねたことがあります。その跡地は地元の人も分からぬ状態でした。

谷藤: 増沢塗は平泉と大きな関わりがあります。平泉が世界遺産に登録されて注目を浴びていますが、仙北道が果たした役割の大きさを感じました。

佐藤: 増田に金持が多い理由を考えてみました。増田は手倉街道と小安街道の出発点、終着点という立地条件が良いわけです。増田周辺は秋田県の重要な産業である葉タバコ栽培が盛んでした。街道農民と増田商人との商取



コーディネーター
谷藤 広子



パネリスト
鈴木 輝夫



パネリスト
石川 利巳



パネリスト
佐藤 豊



アドバイザー
藤原 優太郎

引の結果として、増田に富が集中し、増田に蔵が建ったというのが事実です。

資料の数字を使って説明します。220 年前の増田神町、石田四郎兵衛家というたばこ商人の大福帳から取った数字です。石田家は 285 戸の農家と取引がありました。滝ノ沢～檜山台まで 285 戸あるなか、東成瀬は 160 戸 56% と圧倒的に多いです。享保 15 年（1730）当時の東成瀬の全戸数 428 戸中、160 戸が石田四郎兵衛家との取引・貸し借りしています。

また手倉 52 戸中 26 戸、椿台から檜山台までは 87 戸中 53 戸となっています。次の資料を見ると、手倉の農民は 25 戸中 24 戸が石田家から借用しています。借用で一番多いのはお金で、あとは米や塩や茶など。手倉で生産できない物を石田家から購入していたようです。

返済方法ですが、お金で返しているのは 4 戸しかなく、葉タバコ、真綿、大豆、小豆など自家産品で返す農家が多いですね。おそらく昭和 20 年くらいまで続いていたのではないかと思います。こういう取引はどこの商人もやっていますが、葉タバコ生産が多いので、明治 30 年、増田に専売公社が置かれました。

谷藤： このようにして商取引があったということですね。増田の蔵には一度行ったことがあるのですが、ほんとに凄い蔵です。一見の価値はあります。先ほど鈴木さんから、藩境塚が仙台の『風土記』には書かれているが、秋田では書かれているか、というのがありました。この点をアドバイザーの藤原さんにお聞きします。

藤原優太郎： 秋田にもいろいろ古い記録はありますが、羽州街道とかメイン街道の一里塚については、それなりに記録が残されていますが、仙北道のような山道とか細かい所では自分も見たことがありません。江戸時代の一里塚というのは、高さ五尺から六尺、回り四間というのが普通のサイズです。土盛りに目印の木を植えるのが決まりだったようで、土地によって育ちやすい、大きくなる木を植えて目印にしました。

鈴木： 実は 20 年以上前のことです。大胡桃山の道がまだはつきりしない頃に登って、大胡桃山の西の方で一里塚を探すため、刈り払いをしたことがあります。その後、守る会なんかで通るようになりましたが、今ではその場所がどこか分からなくなってしまいました。山道のことですからはつきりしません。

谷藤： まだまだ仙北道には課題がありますし、探し切れないのでいるものがあると思います。「御助け小屋」の存在も分かっていない状態です。藤原さんの話の中で砂金兵記さんが、いまの国道 397 号を開通させ、山越えをしてきたというこでしたら、地図で見るとその道路は仙北道と並行して走っていて、仙北道からも所々で見え隠れしています。これから仙北道を生かしていく上で 397 号は重要だと感じます。

石川： 国道 397 号を、冬も通れる道にしようという運動が平成 15 年頃からあります。国道 107 号は通年通行しているので、こっちも負けていられないぞという思いはあります。

昔は仙北街道を冬でも歩いたかも知れません。この道を使って源義家の軍が平泉、多賀城に帰ったという言い伝えもあります。飢餓の時に山道を使い、3000 倍の米を秋田から胆沢に送っていただいたという話があります。もしもあり得るのであれば、国道 397 号と仙北道を結ぶ山道をつくっていただきたいと思っています。



谷藤： フロアーの方から拍手があり、ご賛同いただいたと思います。フロアーの方で意見がありましたらお聞かせ下さい。

質問 1： 奥州市胆沢区から来た佐藤です。私が小学校の時、婆さんからの話として母親から聞きました。明治の頃、秋田では雑穀が足りないため、秋田の人達が来て畑を借りて大豆や小豆、雑穀を作り、秋田に運んで行つたんだよ。途中に「助け小屋」という山小屋があつて、休むことができるんだよ、と教えてもらいました。藤原先生にお聞きしたいのですが、岩手から秋田に雑穀が運ばれたことはご存じでしたでしょうか。

藤原： 私もすべて調べているわけではありませんが、街道や山小屋を通して、人や往来物が行き来したというのは間違いないありました。今お聞きした、胆沢の方で雑穀作って秋田に持つて行つたというのは初めて聞きました。秋田は岩手や津軽に比べれば米は良いはずです。秋田の方が豊かであったと聞いています。ここで初めて逆の話を聞いて驚いています。そういう資料があれば、見てみたいですね。資料よりは昔の生の話を聞くのが生きた記録になります。皆さんも年寄りから聞いた話を記録にとどめておいて下さい。

谷藤： いろいろな話が出ました。アドバイザーの藤原先生にまとめて頂きたいと思います。

藤原： 平泉には有名な秀衡塗がありますが、黄金と漆に支えられたのが平泉の文化でした。仙北道を通した商人の道であり、砂金兵記の近代道路でもありました。近代の道であつても、何十年か経てば、歴史の道になるわけですから、記憶をとどめることが大事です。

時代の経過とともに物語は変わってきます。意識しながらやつていけばいいのかなと思います。増田の町は小安街道、手倉街道の合流点として栄えました。それは商人たちの努力の結果だと思います。

増田はお金持ちの町で秋田県の銀行発祥地です。増田と水沢との繋がり、商人の繋がり、金融関係の繋がり、歴史に残された物語を大事にしながら、道の周辺を見ていくべきいいのではないでしょうか。

谷藤： 歩く道、車道、両方大事にして、地域資源としての仙北道を守っていきましょう。歩く道は刈り払いを辞めてしまえば終わりです。

行政にもお願いして、一緒に頑張っていきたいと思います。



第2分科会

第2分化会「日本一美しい村にするには」

鎧啓記(コーディネーター): 第2分科会では「日本一美しい村にするには」というテーマで、さまざまな角度から東成瀬村の魅力と、これからどのようにすれば日本一と胸を張って村づくりをしていけるか、そのようなことを話題にして、みなさんと考えていきたいと思います。それでは東京からいらっしゃいました加藤様から順番にお願いします。

加藤俊宣(パネリスト): 「日本で最も美しい村連合」(以下、美連合)の理事という立場で参加しています。

美連合は2005年10月、7つの村からスタートさせ、「失ったら二度と取り戻せない、日本の農山村の風景や環を守る活動」を行っています。現在、全国で44の村や町が加盟していますが、三つの特徴があります。①スタートはフランスの小さな村で、ベルギー、イタリア、日本などが加盟 ②人の営みがつくりだす世襲遺産を残す ③個人や企業のサポーター制度が支えている。この3点です。中に資格委員会があり、ここで加盟や5年ごとの更新審査します。東成瀬村は100点満点の70数点で合格でした。美しい村がお互い手を結んでブランドをつくり、世界中の人のよび込むことを目標にしています。

鎧: 美しい村を後世にどうやって残していくか、再審査を受けながらどうやって継続させるか、ジオパークも4年ごとに審査がありますが、世界遺産は再審査がありませんね。緊張感を強いてくれる、非常にいいシステムだと思います。

東屋幹男(パネリスト): 私は約30年間、この東成瀬村の営林署で国有林の管理を努めきました。東成瀬村全体約6割が国有林です。今日話題の仙北道も、秋田側の入口を除き全て国有林です。

栗駒山麓と焼石を含むこの一帯で、私が山のことを一番知っているという自負がありました。昨今はその自信が揺らいでいます。というのも今年の大雪でいたる所でブナの枝が折れ、風景が変わってしまいました。自然いうものは災害などで変わるものだと教えられました。仙北道にしても自然界の出来事で、ルートが変わることがあったのではないかと思っています。

鎧: 次にご登場いただく谷藤さんですが、仲間たちと農産物を加工して、おいしい物を沢山つくっています。私の前に並んでいますが、農林大臣賞を受賞した完熟トマトのケチャップとかジャム、トマトソース、草餅など実際にたくさんあります。

谷藤トモ子(パネリスト): 私は隣町の果樹農家から東成瀬村に嫁いきました。嫁いで十数年経ったころ、村の生涯学習で開催した食品加工講座に参加しました。

採ってきたタケノコとかキノコを缶詰屋さんにお願するばかりでなく、自分たちの手で保存できないかが狙いでいた。その後、村や農協の援助を受けながら徐々に拡大し、今では20種類の加工品ができます。平成21年に成瀬加工研究会として独立し、56歳から82歳までの13名で頑張っています。

鎧: 瓶のラベルなど自分たちでデザインしているようですが、一部は仙台のデザイン会社と共同作業するなど、より広い人達に販売したいという気持ちが商品に表れていると思います。加藤さん、東成瀬村を見てまわったそうですが、どの様な印象を感じましたでしょうか。

加藤: 美連合に入るには条件があります。人口は1万人前後未満で、人の営みが作り出す地域資源が2つ以上ある。さらに住民一人あたり25円を運営しているNPOに出していたとき、議会も合意すること。この活動は住民運動です。山が美しいばかりでは過疎の村はつぶれます。子どもが沢山生まれ、観光客が多く来るにはどうすればいいか、知恵を働かせるのが美連合の目的です。

東成瀬には昨年3月に始めて来ました。第一印象は「豊かな所だなあ」です。今日の午前中は栗駒高原に行ってきましたが、人間が作り出せない自然の美しさを守っている国土管理は村の宝です。佐々木村長さんははじめ、会った方が人情豊かな、しかし頑固な人たちで、これならやり遂げるのではないかと思っております。大変素晴らしい地域資源がいろいろありますが、外から見たとき、東成瀬はこういう所だといえる所を、ぜひ作っていただきたい。

鎧: 山がいくら美しくても努力しない村、過疎になつた村は潰れる。これは現実だと思います。点在する美しいこの村の魅力をどのようにつなげて外に発信できるか。それが東成瀬村の課題だと思います。

東屋: 東成瀬が美連合に加盟した理由の一つとなった、緑の回廊の話をさせてください。

1950年代から1960年代の日本高度成長に合わせ大量のブナが伐されました。ほとんどパルプ需要です。東成瀬のように国道が近い便利の良い所では、ブナを伐るために林道がたくさんつくられました。そのブナを伐採したあとに杉を植えるわけですが、たまたま急峻な場所で、当時の土木技術では林道を作れなかった所のブナが残されました。そのブナとその時植えた奥羽山脈の杉が緑の回廊になったわけです。仙北道はまさに全部が緑の回廊です。山菜も多いうちにカマモ、カモシカがいて当たり前。東成瀬の山はそんなところです。

鎧: 谷藤さんはこの村に生まれ育った方じゃなくて隣の湯沢市からお嫁に來たそうです。来てみたらなんかおもしろい村の食習慣があった、などの話があつたらお願ひします。



コーディネーター
鎧啓記



パネリスト
加藤俊宣



パネリスト
東屋幹男



パネリスト
谷藤トモ子



アドバイザー
長谷川留美子

谷藤： 東成瀬に来て一番驚いたのが「なんでも一本煮」。春であれば「タケノコの一本煮」、「ゼンマイの一本煮」、「ウドの一本煮」となんでもそのまんま出てくる。それがまた「うまかった」というので、いたるところで盛んに広めています。山菜の太さや長さが他とはまるで違います。キノコの「モダシ」（ナラタケ）はナメコのようにネバネバが強くこれも驚きました。これらが生える山の深さが違うためですね。そのような材料でつくる加工品がおいしいのは当たり前です。

今晩の街道談義に「あずきでっち」というのが出ます。小豆の中にもち米を入れて突き固めた、金つばのようなものです。私たちがつくった名物なので、楽しみにしてください。

鎧： 今日のテーマ「日本一美しい村にするには」ですが、いろんなことが考えられると思います。日本一の美しい村づくりに繋がる、あるものの美しさが大事だと思います。東成瀬にある美しさの「これがすばらしい」というものを言っていただけませんか。

東屋： 私は隣村の旧山村に住んでいますが、山村は東成瀬に比べて山は浅いです。深さでは東成瀬にはかないません。そこで採れる山菜、キノコは格別です。ひとつだけ東成瀬の売りを上げれば、それは栗駒山麓の「仙人水」です。国道342号沿いに湧き出す水で、山菜採りや道路工事の人達に大人気だし、宮城県からもたくさん的人が車で汲みに来ます。この水で「あずきでっち」をつくれば村の名物ができあがると思います。

鎧： いきなり横綱級が出ましたね。私も同感です。谷藤さんから東成瀬の自慢できるもの、美しいもの、これだっていうものをひとつでもふたつでも挙げていただければ。

谷藤： 私も「仙人水」を言おうと思っていましたが、東屋さんに先に言われてしまいました。私は山菜が格別だと思っています。この山菜はいろんな宿泊施設でも使われていますけど、もっともっと工夫して、お客様にサービスできたらいいのではないかと思っています。

鎧： さっき東屋さんが言ったように、ただおいしい水があるだけじゃなく、その水でつくった「あずきでっち」をその場で売るとかの工夫は必要ですね。谷藤さんが言ったように、当たり前のおいしいものに付加価値つけるのが加工です。秋田県は加工下手なのでレベルアップする工夫が必要です。

加藤： 私が認めている東成瀬の最大の地域力は、「学力日本一の東成瀬村」です。これこそまさに地域の総合力です。日本中ばかりか韓国からも視察が来るようですが、これは教育も含めた人材資源です。美連合の目的や手段、視点はいろいろありますが、「美しさとはそれを体験する人の心の中で生まれるものであって、人におしつけるものではない。人によって美しさはすべて異なる」です。そういう豊かな多様性を村とか町の中に作り込み、来る人がチョイスをする。「私は街道を歩きたい」「私は田んぼの中を歩きたい」「私は釣りをしたい」「私はじいちゃんとばあちゃんとお茶を飲みたい」などさまざまですね。来た人が多様性の中から選択できるようにすればいいのではないでしょうか。

鎧： 皆さんのお話から東成瀬村の可能性がかいま見えてきました。すばらしいものをアピールできないと人を引き付ける宝になりません。外部から来る人だけではなく、村人にも分かってもらわないといけません。皆さんからは最後に東成瀬に残したいもの、期待したいこと、こうなってほしいものをお話いただきますが、アドバイザーの長谷川留美子さんから、ふるさと東成瀬についてお話をいただけますか。

長谷川： 私は皆さんと違う点は、この土地で生まれて、この水で育ったことです。東成瀬村を出て30年近くになりますが、思春期になってからこの山奥に育ったことに戸惑いが少しありました。湯沢高校に進学したら、「おおー、あの山奥から来たのか」という雰囲気でした。しかし、いまはまるつきり逆です。村から離れて住んで、村のすばらしさがわかりました。

あのころ負い目に感じたことが、今ではすべてすばらしさに転換しています。加藤さんがお話をされたように、「人の心から持っていく村づくり」がこの村には似合っていると思います。笑顔で人を迎える心、笑顔で自然を感じる心を忘れないと思っています。

谷藤： 私が期待したいことですが、スキー場のゲレンデ部分を、夏場の観光に利用することです。とにかくお客様が来てくれない場合には、村も豊かにならないと思いますし、若い人たちがどんどん出ていくのを、何らかの手段でストップをかけたいと思っています。ただ漠然と考えているだけですけれども。

東屋： 日本一のブナ街道を歩くには、非常に体力を要します。誰でも歩ける所ではありませんので、私たち「栗駒山麓ゆうゆうの会」は、誰でも行ける栗駒山麓のブナ林の案内を今後とも続けていきます。熊と触れ合い、サンショウウオをつかむ、こういう案内を一生懸命しておりますので、これからも続けていきます。

加藤： 最後にこの村にある16の自治会ごとに、リーダーが中心となって、絶対に一つだけ、ここだけを見てほしい、ここに立って見てほしいという所を作つて欲しいですね。

東成瀬村の人が選ぶ、わが村、集落の美しい景観というのをみんなで決めて、アピールしていただくのがいいんじゃないかなと思いました。

鎧： 長谷川さん始め、パネラー3の方々からいろいろお話をしました。このお話をこれで終わらせたら意味がなくなってしまいます。問題はどうやって実現していくかです。我々は東成瀬村の応援隊にならなければなりません。話に出たことを中心に、ひとつひとつ実現していくことには、「日本一美しい村」になることができません。そんなことを村の方達と一緒にやっていければと思います。「日本一のブナ街道」というキャッチフレーズに負けない仙北道と、美連合加盟を忘れずに、新しい村づくりに向けてスタートしましょう。



街道探訪会 A

「仙北道を歩こう」踏査コース



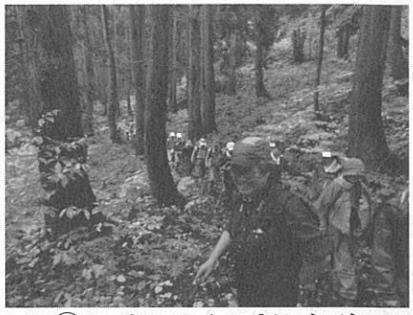
①まるごと自然館



③弘法の祠 (ほこら)



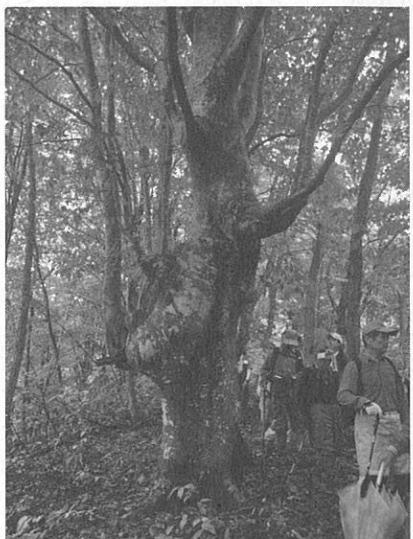
②姥懐 (うばふところ)



④弘法の祠を過ぎた杉林



⑥弘法の足跡付近



⑤ブナ街道



⑦ヤマブドウ



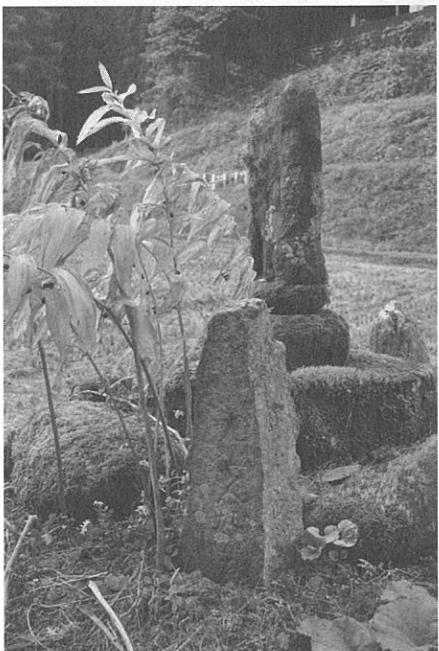
⑧弘法の足跡



⑨お園の越所 (こえど)



⑩曲坂 (まがさか) の道標



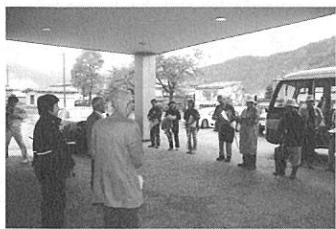
⑪首もげ地蔵



⑫首もげ地蔵前で記念写真

街道探訪会 B

「仙北道を学ぼう」バスツアーコース



①出発式



③田子内橋見学



②田子内橋



④小貫山堰



⑤小貫山堰の説明看板



⑥不動滝



⑦夢なるせ直壳所



⑨首もげ地蔵



⑧手倉御境口 御番所跡の碑



⑩仙北道の手倉入口



⑪まるごと自然館



⑫まるごと自然館での昼食

主

催：とうほく街道会議 第7回交流会「よみがえる仙北道」東成瀬大会実行委員会

(実行委員会メンバー：東成瀬村、とうほく街道会議、東成瀬村仙北道を考える会、NPO 法人あきた地域資源ネットワーク、東成瀬村エスコーテー一岳遊会、東成瀬村観光協会、東成瀬村商工会、東成瀬村教育委員会〔公民館〕、秋田県雄勝地域振興局、秋田栗駒リゾート㈱、JA こまち東成瀬支店、東成瀬村婦人団体連絡協議会、農事組合法人なるせ加工研究会、東成瀬村社会教育委員会、栗駒エリア誘客事務所)

オブザーバー：国土交通省東北地方整備局

後

援：NPO 法人全国街道交流会議、あおもり街道会議、すみた街道俱楽部、みやぎ街道交流会、くりはら街道会議、三宿地域連携協議会、出羽の古道六十里越街道会議、越後米沢街道・十三峠交流会、ふくしまけん街道交流会、羽州街道交流会、NPO 法人東北みち会議